

## 修士論文概要

### 日本モンゴル教育病院のリスク感性分析 —病院長、副病院長及びリスク管理部長のリスク感性に焦点をあてて—

学籍番号: 22MD0178

氏名: 藤川 理恵

#### 研究の目的と方法

本研究の目的は、日モ病院<sup>1</sup>の病院長、副病院長、リスク管理部長のリスク感性を明らかにすることである。

日モ病院が目指す基礎的な診療サービス提供の実現には、リスクマネジメントが必須であり、日モ病院にモンゴルの病院で初となるリスク管理部が設置された。筆者は、2019年から2022年まで日モ病院プロジェクトに看護・患者管理専門家として従事し、リスク管理部の活動を支援してきた。

モンゴルの医療現場では、インシデント・アクシデントは個人に対する査問や懲罰を与えるための材料という個人の責任を追及する風土があり、医療におけるリスクマネジメントの目的が組織全体に伝わりにくい。その結果、患者、家族、来院者および職員の障害や、病院の信頼、経済的な損失を最小限に抑え、医療の質を保証するという組織としての役割が十分に果たせず、基礎的な診療サービス提供の実現に影響を及ぼしている。

このような経験から、筆者は、医療現場におけるモンゴル人のリスク感性そのものについて問いを抱き、日モ病院のモンゴル人看護師を対象としたリスク感性分析を実施した。研究結果として、当初の予想に反し、意外にも日モ病院のモンゴル人看護師のリスク感性は高いことが明らかになった。事実、看護師らは安全が保障されない危機感を感じながらも、看護師としての責務を果たすことを大切にしていた。一方で、問題も明らかになった。個々のリスク感性は高いものの、それが組織単位で機能していないという点である。

そこで本研究は、日モ病院の幹部に焦点を当てることとした。ここでいう幹部とは、日モ病院長、副病院長、リスク管理部長らを指す。幹部に着目する理由は、組織的なリスク感性をめぐる問題は、看護師個々の意識改革のみで対応できるものではなく、むしろ組織マネジメントの問題として認識すべきものだからである。以上より、本研究の目的は、日モ病院の病院長、副病院長、リスク管理部長のリスク感性を明らかにすることである。

研究方法は質的記述的研究である。インタビューガイドを作成し、対象者に半構造化インタビューを実施した。対象者の語った言葉や出来事の表面から離れず、対象者が日モ病院で直面するリ

---

<sup>1</sup> 独立行政法人国際協力機構(JICA)は、2019年、モンゴル国(以下「モンゴル」とする)に、日本モンゴル教育病院(現「モンゴル国立医科大学日本モンゴル病院」、以下「日モ病院」とする)を無償資金協力で建設し、2017年から2022年にかけて、「日本モンゴル教育病院運営管理及び医療サービス提供の体制確立プロジェクト」(以下「日モ病院プロジェクト」とする)を実施した。

リスクとはどのようなことで、どのように捉え、どのような対応を行い、なぜその行為に至ったのかを解釈することで、対象者のリスク感性を明らかにすることとした。分析の作業プロセスは、1) 逐語録作成、2) 概念生成、3) カテゴリー生成、4) カテゴリー間の関係性探索、である。

## 論文の構成

- 1 章 はじめに
  - 1-1 研究の背景と目的
  - 1-2 方法
  - 1-3 用語の定義
  - 1-4 論文の構成
- 2 章 医療におけるリスクマネジメント
  - 2-1 リスクとは
  - 2-2 リスクマネジメントとは
  - 2-3 医療におけるリスクマネジメントとは
  - 2-4 日本の医療におけるリスクマネジメントの経緯
  - 2-5 先行研究からみえる日本の病院の組織的リスクマネジメントの機能要件
- 3 章 日本モンゴル教育病院のリスクマネジメント
  - 3-1 モンゴルと日本モンゴル教育病院
  - 3-2 日本モンゴル教育病院とリスク管理部
  - 3-3 先行研究からみえる日本モンゴル教育病院のリスクマネジメント
- 4 章 日本モンゴル教育病院の病院長、副病院長、リスク管理部長のリスク感性の実態
  - 4-1 調査・分析概要
  - 4-2 分析結果
  - 4-3 考察
- 5 章 結論と今後の課題
  - 5-1 結論
  - 5-2 本研究の限界と今後の課題

## 論文の概要

本論文は5章から構成される。

1章は研究の概要として背景と目的、方法を示した。また、本論文で用いる用語の定義を行った。

2章では、リスクやリスクマネジメントを概観し、医療におけるリスクマネジメントについて記述した。本研究の背景には、日モ病院プロジェクトにおいて日本式の病院運営マネジメント(本研究ではリスクマネジメント)の導入を図る上で抱いた問いがある。そのため、日本の医療におけるリスクマネジメントの潮流および、筆者らが実施した先行研究からみえる日本の病院の組織的リスクマネジメントの機能要件を中心に述べた。

3 章では、既存資料や筆者らが実施した先行研究から日モ病院のリスクマネジメントの現状及び課題を記述した。モンゴルの保健医療分野においてリスクマネジメントの教育や制度が整っていない中、日モ病院ではリスクマネジメントの考え方の普及や組織体制の整備に取り組んでいる。一方で、個々のリスク感性は高いものの、それが組織単位で機能していないという問題も明らかになった。課題として、日モ病院のリスクマネジメントには、個々のリスク感性を支援する体制や職場風土が欠如していると考えられた。

4 章では、日モ病院の病院長、副病院長、リスク管理部長に実施した半構造化インタビューからリスク感性を抽出し、分析結果として示した。その後、2・3 章の既存資料や文献を参考に分析結果を考察した。

分析結果は、日モ病院の病院長、副病院長、リスク管理部長のリスク感性として【モンゴル特有のリスクを把握】【あらゆるものがリスクになりうると認識】【管理職としての行いを省察】【幹部の一貫性を持った取り組み】【「人」に関する取り組みを重視】【組織横断的に活動】【対象と必要性に応じた研修を実施】【報告から対策まで円滑にする PDCA を意識】の 8 のカテゴリーを生成した。

カテゴリー間の関係性としては、まず、【幹部の一貫性を持った取り組み】は、【モンゴル特有のリスクを把握】することや【あらゆるものがリスクになりうると認識】すること、【管理職としての行いを省察】することに支えられ、日モ病院のリスクマネジメントの土台として位置していた。そして、日モ病院のリスクマネジメントは、【幹部の一貫性を持った取り組み】と【「人」に関する取り組みを重視】するという基盤の上に、【組織横断的に活動】したり【対象と必要性に応じた研修を実施】することで【報告から対策まで円滑にする PDCA を意識】し取り組んでいた。

当初の予想に反して対象のリスク感性は高く、個々としては日モ病院のリスクマネジメントを円滑にしようと尽力していることが明らかになった。一方で、不足しているリスク感性や、日モ病院のリスクマネジメントを推進させるためには個々の尽力だけでは不十分であることも明らかになった。この結果を踏まえ、2・3 章の既存資料や文献を参考に、モンゴルの病院に沿ったリスクマネジメントを推進させる運用モデルの一考察として、「あるべき姿」を示した。

5 章では、研究目的に対する結論及び、本研究の限界と今後の課題を述べた。本研究は、日モ病院の病院長、副病院長、リスク管理部長の 5 名を対象として調査・分析しており、他のモンゴルの病院にも当てはまるとはいえない。また、考察で示した「あるべき姿」の有用性も未知数である。今後は、先行研究及び本研究で明らかになった結果を応用し、日モ病院やモンゴルの病院に沿ったリスクマネジメントを推進させる運用モデルを構築する必要がある。